Y01a　7〜8 世紀の日本の天文学

○相馬　充、谷川清隆 (国立天文台)

日本の古代の天文記録は日本書紀・続日本紀などの六国史のほか，日本紀略などの歴史書や多くの日記類に記された．それらは神田 (1934, 1935) によってまとめられている．この中で日本の天文記録は推古天皇時代の西暦 620 年に始まる．日本書紀の最初の天文記録である．

森 (1991, 1999) は日本書紀を巻ごとにα群とβ群に分類した．α群は正しい漢文で書かれた巻の群，β群は漢文に倭習が見られる巻の群である．7 世紀の巻について，西暦でまとめると，641 年まで (推古・舒明天皇の巻) がβ群，642〜671 年 (皇極・孝徳・斉明・天智天皇の巻) がα群，672〜686 年 (天武天皇の巻) がβ群である．

日本書紀の天文記録の特徴は群と関係があることが判明した．まず，α群には天文記録が極端に少なく，計 30 年間にわずか 3 例のみである．その 3 例は星食と月食と隕石だが，星食は現在の計算でも確認できず，月食も日本からは見えないはずのものであり，隕石は真偽を確認しようがない．一方，β群は西暦 620 年以後の計 37 年間に天文記録が 21 例もある．そのうち，西暦 628 年の日食，西暦 640 年のアルデバランの星食，西暦 681 年の火星食は日本で観測されたことが確実なものである．さらに，β群の期間に日本で見えたはずの日食 15 個のうち 5 個が記録されており，晴天率を考えると，実際に観測されたものを全て記録したと考えられる．β群には彗星の記録も 7 例あるが，そのうちの 5 例は中国にもあり，実際に見えたものであることがわかる．西暦 686 年〜697 年の持統紀はいずれの群に属するか不明であるが，この巻には日食が 6 個記録されている．これらはほとんどが日本で見えなかったはずのもの，つまり観測記録ではない．この傾向は続日本紀の 8 世紀全体の記録にもあてはまる．

以上のとおり，日本の観測天文学は 7 世紀に始まったが，7 世紀の観測天文学は発展と衰退が繰り返され，持統紀から 8 世紀には観測の記録を止めてしまったことが判明した．